

---

# 私小説「お姉さんと私」

豆腐けーき

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

私小説「お姉さんと私」

### 【Nコード】

N0328C

### 【作者名】

豆腐けーき

### 【あらすじ】

「私小説」と記述するからには当然、私の実体験であり私以外の人間の体験、経験、妄想ではないことを先に明記しておく。何故、念を押すのかといえば、私自身が今でも夢のように思えることであり、且つ今の私でなければ夢と思いたいことだからである。…そんな私と「お姉さん」の出会いから別れまでのお話です。多少の言葉の違い、若干の美化はあれども基本的には実話を元に構成しておりますのでご了承の程を…

私小説と記述するからには当然、私の実体験であり私以外の人間の体験や妄想ではないことを

先に明言しておく。何故、念を押すのかといえば、私自身が今でも夢のように思えることであり、且つ今の私でなければ夢だと思ってしまうようなことだからである。

さて、まずは私について少々語ってみようと思う。

私は昭和の後期にこの世に生まれ大病を人並みに患いつつ、現在まで命を永らえている大変運の良い好青年である。もちろん私も人間であるから生まれたときから好青年だったわけではない。色々貴重な経験を経て今の立派な好青年に成長したわけである。また、好青年であるからして私は当然のごとく、腹と股間に一物を持っているわけである。

これで、読者の諸氏にも私のことが大まかには理解していただけたと思うが、細かい事は文中で語ろう。これは私小説であって私の就職面接用の履歴書ではないのである。

さて時代は今から遡ること数年前、私がうら若き大学生としての青春を謳歌していた時代のこと。世間では「ぐるーぶ」や「あむろなみえ」の歌が「0157」と並んで流行し、また遠い日本の裏側では日本大使公邸で物騒な事件が発生していた頃の話である。

私は運命的な出会いをした。仮にその人の呼称を仮に「お姉さん」としよう。もつとも、私はその人をお姉さん以外の呼称で呼んだことではないし呼びたいとも思わない。そのお姉さんという人物を一言で表現するのであれば古式ゆかしき日本女性という言葉が最も相応しいと思うし、また私以外にも賛同する人は決して少なく無いと断言できる。慎ましかで所作に無駄がなく、たおやか。私が初めて女というものを強く意識した人物でもあるからだ。

では話を始めよう。私がお姉さんと出会ったのは町の小さな

映画館でのことである。お姉さんとは偶然、いや必然だろう、席が隣り合ったことがきっかけで知り合うこととなった。映画が終了した後、お姉さんと私はお茶を飲みながら楽しく映画のことや様々な話を語り合った。お姉さんの話はとても面白いだけでなく興味深いもので、私の知らない話をよく知っており、私は夢中になってお姉さんの話に耳を傾けた。またお姉さんも私の話す他愛の無いことや悩み事を真剣に聞き、そして相談に乗ってくれたのであった。言葉を交わすうちに知った幾つかのこのうち最も重要なことは、お姉さんの趣味が映画鑑賞らしく、頻繁にその映画館に来るということであつた。それを聞いた私は映画鑑賞よりもお姉さんに会えることを期待してその映画館に足を運ぶようになっていた。もちろん学生の身分であるから毎度の映画代は少なからぬ出費ではあつたが、お姉さんに会えるかもしれないと思えばその程度の出費はなんとかやりくりできる範疇と言えた。

だが、私は常にお姉さんと二人きりで歓談していたかといえれば決してそうではなかつた。お姉さんを慕う人間は私以外にも数多く存在し、中にお姉さんを「お姉さま」と慕い、私がお姉さんに近寄ることを快く思っていない輩がいたことには正直辟易した。そのときの様子を簡単に書き記すと以下ようになる。

映画の終了後、テーブルを囲むように私とお姉さん、そして見知らぬ女の子の三人が座る。私は女の子とは初対面なので自分の名乗り、よろしくと挨拶をする。しかし女の子は私の挨拶など聞かえなかつたかのように嬉々としながらお姉さんに

「あのね！ あのね！こないだね、凄かつたんだよ？実はね」

と、自分の近況を話し始めるのであつた。お姉さんは珍しくあわてた様子を見せ、

「ちよつと待ちなさい！ちゃんと挨拶しなきゃ駄目でしょ？」

そんな風にやんわりと女の子をたしなめる。すると女の子はあからさまに不満を露にしながらも吐き捨てるように、

「……………」

と聞き取れないくらい小声で呟き、そしてそれが終わると同時に、「でね！ でね？ 聞いて、聞いて？ それでさあ」

再び堰を切ったようにお姉さんに話し始めるのであった。お姉さんはその女の子の話を困ったような表情を浮かべながら聞いていたのだが、すつと手で女の子の話を遮り、私の方に向き直り、

「この子は ちゃんつていうの。ちよつと無愛想な子だけど仲良くしてあげてね？」

と少し苦笑しながら女の子の名前を改めて私に紹介してくれたのであった。しかし、そのお姉さんの努力の甲斐も空しく、その後女の子が一方的にお姉さんに話しかけ、お姉さんがその話を聞き、頷いたり時折自分の意見や感想を女の子に返したりといった展開がしばしの間続くのであった。しかしお姉さんはきちんと、

「今の話、あなたはどう思う？」

と、上手に私に会話を振ってくれていたのだが、何せ「オマエニナンカ、キイテマセン！」と拒絶のオーラを全身から漂わせている女の子。私の意見はまるで聞こえないかのようにスルーし再びお姉さんに同じ調子で話し始めるのであった。私も積極的に女の子に話しかけてみたが、全く取り合って貰えず、私の言葉をわざわざお姉さんに通訳してもらって女の子に伝えるといった実に奇妙な光景に頭を痛めつつあった。

暫くして私も流石に女の子から発せられる「アンタ、ジヤマ！ アツチイケ！」というドス黒い拒絶のオーラに気圧されるようにして、

「それでは私は用事があるのでこれで」

とお姉さんと女の子に挨拶し、まるで逃げるかのように席を立ったのであった。すると、お姉さんもすつと

立ち上がり、素早く私の傍まで来ると小声で、

「今日のごめんね。また今度ゆっくりお話ししましょうね」

と私の心中を察したのかのように、少し苦笑しながらそう言ってくれたのであった。

「はい。では、また今度ゆっくりと」

と私は軽く手を挙げ、お姉さんの気遣いに笑顔でその場を後にしたのであった。もちろんそこにあつた女の子の不機嫌そうな顔は観なかつたことにしようと思つたものだ。

後日、あらためてお姉さんから聞いた話であるが、その女の子はいわゆる百合の華……な女の子で男性嫌いの女性好きであり、お姉さんを恋愛対象や憧れの対象として慕っているとのことであつた。お姉さんは女の子に恋愛対象として好かれても困るのだけれど、直接的に何かされるわけじゃないし、普通に話をしたり相談にのつたりしているだけなので、邪険にするのも悪い気がすると言つていた。言い換えればあの子はお姉さんにとっては可愛い妹のような存在に思えるのだそうだ。

「決して悪い子じゃないのよ？あの子も色々あつたみたいだし」

そう私に話してくれたお姉さんの少し困つたような、それでいて少し寂しそうな表情は今も忘れがたい。

さて、話を続けよう。私がお姉さんと出会つて半年ほどが経過する頃になると、私とお姉さんはかなり親しい存在になつていたと自負している。尤も、残念なことに友人として……ではあつたのだが。私がそう言い切るのは、正直なところ私とお姉さんの関係はプラトニックなものだけではなかつたこともある。だが、最も大きな点は私がお姉さんから悩みを打ち明けてもらつたことにあると考えている。誤解の無いように付け加えておくが、肉体関係に関しては二人ともそういう関係だけを望んでいたわけではない。私達は基本的に映画館を通じてしか会わず、しかもその映画の後の会話の時間をこそ大切にしていたからである。その大切な時間に私達は多くの言葉を交し、お互いの言葉に耳を傾け、共に悩み、考えたのだつた。

当初は自分の悩み　それは家族や友人にさえ打ち明けがたい悩みではあるのだが　それをお姉さんに打ち明け、相談にのつてもらつてばかりいる私だつた。しかし、私に他人に打ち明けがたい悩

みがあつたのと同様にお姉さんにも他人に打ち明けがたいことを持つており、お姉さんはそれを私に話してくれたのである。そのときの私の感情は正直複雑であつたことを覚えている。

そのお姉さんが私に話してくれたのは昔話であつた。

「私には戻る場所がないの。実家にも帰れない。家族にももう会えないの」

そう寂しそうに語つた横顔は何故か少し微笑んでいた。

夢を追いかける。言葉にするとそれは綺麗だがその代償としてお姉さんが支払つたものは家族と故郷だつた。お姉さんは自分の夢を追う為に周囲の反対を押し切り、親に縁を切られても尚上京し、そして自分の夢に向つて走り続けたのだつた。その時の心情をお姉さんは

「家族に縁を切られても自分に嘘をつくことだけは出来なかつた」と語つてくれたのだつた。

そうしてお姉さんは走り続けた。走つて、走つて休む間も無く走り続けた。自分にはもう戻る場所はない。

そう自分を追い詰めて走り続けた。走つて、走つて、ただひたすらに休むことなく走り続けた。辛くはなかつた。ただ、毎日があわただしくまるで光の矢のようにあつという間に過ぎていったように感じたそうだ。

そして故郷を離れて八年の年月が経過した時。お姉さんは気がついてしまった。いや、寧ろ悟つてしまった。

自分の夢は決して自分には叶える事が出来ないのだということに。自分は永遠に本当の夢に辿り着けず、小数点のようにいつまでたつてもきにはなれないのだということに。自分はどう足掻こうと代用品にしかねれないと気がついたのだ。

そしてそのころ、お姉さんはもう一つの事実と直面させられたのであつた。それは自分が独りだという事実だつた。親の死に目にも会えない自分を知つたとき、改めて自分がもうこの世には誰も本当の意味で家族と呼べる人がいないと気がついたとお姉さんは言った。

それは自分の父親の死を家族からではなく、昔の友人から聞かされるという事実がお姉さんにそれを気付かせたのだという。

夢は夢のまま叶える事も出来ず、ふと自分ががむしゃらに走ってきた道のりを振り返っても遠くに見える自分の故郷や家族の元には帰れない。しかし、お姉さんは再び歩き始めた。ゆっくりと。夢は叶えられなくても、追い続ける事は出来ると。そこまで私に語ると、お姉さんは真剣な表情で私を見つめ、

「私は幸せよ。だって毎日こうやって精一杯生きているんだから。不幸なんて無い。毎日がとても楽しく、とても幸せ。確かに失ったものや無くしたものも数多く在った。だけど、それでも私は胸を張って言える。私は今もこれからも幸せだと。だって、私は私の人生を生きている。これ以上の幸せはないんだから……」

一瞬躊躇いがちに眼を伏せ、そして再び私の目を見つめ、そのままお姉さんは真剣でありながらどこか寂しげな表情で私に言葉を続けた。

「あなたが私の傍にいてことで私は満たされた。でも、あなたは此処にいるべきじゃない。あなたはこんなところに来てはいけない。あなたは此処に遊びに来ただけ、立ち寄っただけ。こんなところに留まっではいけない……あなたはちゃんとした自分の場所に戻るべきなのよ。」

私は何も言えなかった。何か言おうと……何かを言わなければ……そう思えば思うほど声が出なかった。何故ならお姉さんの言葉は私自身に気が付いていない、私自身の諦めかけていた願いであつたから……

「あなたは私に束の間の夢を見せてくれた。夢を叶えてくれた。それはとても嬉しかった。涙が出そうになるほど嬉しかった。でも、これ以上あなたはここにいてはいけない。あなたはあなた自身の人生を歩みなさい。だから帰りなさい。もう、此処に二度と来てはいけない。帰ってきててもあなたと話しはしないし、あなたを迎え入れる席も無いのだから……」

さあ、お行きなさい。振り返らずに進みなさい。ちゃんとあな

たが本当に愛する、あなたが本当に愛せる女性がきつと見つかるはずだから」

少し涙ぐんだ瞳で私の手を握り、その指先を愛おしそうに…本当に愛おしそうに見つめ、お姉さんは私とお姉さんにとっての決別の言葉を述べたのであった。そんなお姉さんを私は強く抱きしめ

「いままで本当にありがとう」

そう耳元で囁くと、すっと立ち上がり席を離れた。そうして最後にもう一度振り返ったその先にはお姉さんが

「じゃあね」

と微笑みながら手を振っていた。

「さようなら」

そう、最後にそう告げると私はもう振り返らずにその場所を後にしたのであった。

その後お姉さんがどうなったのかは知らない。きっと今でも夢を追って幸せな毎日を送っていると信じている。そんな私も今では結婚したのであった。私のような変わった人間と結婚する相手だけあって、なかなかの変わり者だが私にとっては居心地のいい妻であることに変わりはない。その妻と結婚した今でも最も女らしい人はと尋ねられれば、私はあのお姉さんの名前を挙げるだろう。それほどまでにお姉さんは女らしい人であった。いや、あの人は女以上に女であったというべきだろう。私はこの話を結婚前、妻となるべき人物にも話した。

それはお姉さんとの出会いは私の人生に於ける大きな分岐点であり、そしてお姉さんとの別れもまた大きな分岐点となったからである。

お姉さんの話したとき妻は微笑んで

「その人のおかげだね。私と結婚できるのも」

と笑った。違いない。そういつて私も一緒に笑った。

そして思い出す。最後にお姉さんが私に告げた決別の言葉

「貴方のこの指は女の子を悦ばせる指なの。私にはわかるの。だって、貴方がこの指で触れるたびに私は女の喜びを感じてきたの。だから解るの。貴方の指、貴方の身体はちゃんと女の子を求めていることが…だから貴方はその指、身体を愛する女性の為に使いなさいね？」

そのお姉さんのおかげで今、私はこの妻と出会い、彼女を愛することが出来るのだ。

(後書き)

初めまして豆腐けーきと申します。

「なんだよ…単なる惚気話かよ！」

と思われる方(思われた方)も多いと思うのですが、実際のところはたんなる自慢話です(ヲイ)。

ですが、私の人生は他の皆さんと同じく

「事実は小説より奇なり」

なことが多い普通の人生なのですが、この一件は

確かに私の人生を変えた出来事なんです。

そんな私の私小説ですのでさらりと流して読むもよし、深読みして「こうなんじゃね？」と考えるのもいいかと思います。

最後になりますが、最後までお読み頂きありがとうございました。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0328c/>

---

私小説「お姉さんと私」

2008年11月7日06時36分発行